

麻生 玲子

illustration

九条 AOI



オーバー  
ナイト



オーバーナイト

《立読み版》

麻生 玲子

イラスト 九条 AOI

## 序章

——カラン。

ミキシンググラスからカクテルを注いだ時にだけ、小さな氷が音をたてた。

カクテルをステアするその指先のなめらかな動きに、数人の客が見入っていた。派手にシェーカーを振らないカクテルでさえ、さいきなお齊木那央が作るとなにか芸術じみている。

「ステア、本当に音がしないんだね」

「はい？」

カクテルを注文した客に言われて、齊木が視線を上げる。

「上手なバーテンダーは、ステアの時に氷やバースプーンの触れる音が一切しないって聞いたことがあるから」

「ありがとうございます。ちゃんと習ったわけじゃないんですけどね」

にっこり笑う齊木は、若干二十四歳。この店を任されて、ちょうど二年になる。

そのほっそりとしたルックスと柔らかな物腰、加えてカクテルを作るときの仕草の美しさで、この界かい

限わいですぐに話題になったバーテンダーである。

神楽坂かぐらざかという場所柄か、店は少々奥まった場所にあり、一見いちげんの客は入りにくい。しかし一度入店すると、ほとんどがリピーターになるといふ。

店内はさほど広くはなく、カウンターが六席とテーブル席が三つあるだけだが、殺風景ではなく、どこかホッとできるような空間になっている。

「お客様は、先週もいらっしやいましたね」

「あれ、覚えてくれてるんだ？」

「記憶力はいい方です」

慇懃無礼いんぎんにならない程度の愛想の良さ、客の見極め、心配り——高級フレンチの店にでも来たみたい。な錯覚すら覚えるが、そこまで肩肘の張った店でもない。

「この店は、君がオーナー？」

「違います」

斉木は、この店の雇われバーテンダーである。だが、他に店員がおらず、彼一人で店内を切り盛りしているのだ。

「まだまだ修行中ですよ」

彼が笑うととても優しい表情になるのは、その睫まつげが長いからなのだろう。ふと目許めもとを和ませるだけでも、人の目を奪うような表情に見えるのだ。

「うくん、欲しいなあ」

その客の眩やがひきにうつすらとした笑みを返し、自分の仕事に戻っていく。つまみは簡単だが、手の込んだものが多い。アルコールとの相性を考えた気の利いた肴さかなに、レシピを聞きたがる女性客もちらほら。

ここは自分の城だ、と斉木は思っている。初めて、すべてを任された自分だけの城。ささやかだが、すべてに斉木のセンスを生かすことができるのだ。

二十歳で東京に出てきて、四年目になる。今までに何軒もの飲食店で働いた。年齢的問題はなかったし、ルックスで採用になる場合も多々あった。

主に接客を担当してきたが、厨房ちゅうぼうも手伝った。いずれは自分の店を、と思っていたので、勉強もしていた。

現在のオーナーは、以前働いていた店のオーナーでもある。新規開店するバーのマスターをやらない

かと誘われたのは二年前のことだ。

願ってもない申し出に、斉木はすぐに承諾した。だが、開店までの数カ月は死ぬ気で勉強もした。いくら小さな店とはいえ、仕入れから接客までのすべてを管理しなくてはならない。

経営の勉強などしたことのない斉木にとって、実に新鮮だがスリリングな体験でもある。それは、現在でも継続中だ。この店をどのように育てていくのかは、斉木の力量にかかっている。

精神的な負担は嫌いではなかった。それを自らの手でどのようにクリアしていくのか、自分の力量を試すチャンスでもあると考えているからだ。

だが、その一方で抱えるストレスを、うまく発散する術も知っている。

客から送られる秋波は笑ってやり過ごす。体の関係を持たないというのは、彼自身が自分に課したルールだ。かといって、決してストイックなわけではない。

時に欲望を発散させるのも必要なこと——特に、斉木のように若く健康な男の場合は。

「会社勤め、じゃないよね」

シャツの裾から手のひらを滑り込ませながら訊きいてくる男に、斉木はうつすらと笑う。

「今、仕事の話とか必要？」

「必要じゃないけど……泊まりでいいのか、帰る必要があるのかだけは訊きいておかないと」  
喉元のキスに目を細め、久しぶりの快楽の兆しに吐息を洩らす。

「僕は、どっちでも」

返しながら男の背中に触れた。筋肉質の体は斉木の好みだ。乱暴に攻められたら、どれだけ燃えるだろうか。

誘うように耳朶を噛むと、応えるように下半身を押しつけてくる。硬くなり始めたものを感じて、喉奥でククツと笑う。

「慣れてんだな」

「初心うぶなのが好みだった？」

——それは悪いことをした。

見下ろしてくる男に視線で返すと、彼は首を振った。

「冗談だろ。その方が効率的に楽しめる」

「効率的、ね」

おもしろいことを言う、と斉木は思う。なめらかな肌を晒しながら男を誘った。慣れた手順、慣れた行為、慣れた快樂。

日曜の夜、ホテルはさほど混んでいないので、簡単に部屋は見つかる。セックスのためだけに部屋を取るのも慣れたこと。

快感を得るためだけのセックスは、斉木にとってスポーツと同じだ。罪悪感も負担もなく、ただ体が求めることだけをしている。

舌先が肌の上をなぞる感覚はもどかしく、男の股間へと手を伸ばす。硬くなり始めているそこをなぞり上げると、彼は獣じみた視線で斉木を見返した。

「せっかちなな」

「久しぶりなもんで、ね」

実際、仕事が忙しくて、こうして男と睦み合うのも三週間ぶりくらいだ。深夜まで店を開いているせいで、平日にはこのような機会がないのだ。

キスをして、互いの舌を絡ませ合いながら体をまさぐり合う。濡れた舌先に喉元をたどられると、唸うなるような声が洩れた。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

オーバーナイト

《立読み版》

発行日 2012年5月25日

著者名 麻生 玲子

イラスト 九条 AOI

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Reiko Asou 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。